

行脚を通して伝わる 「神仏の慈悲」⑬

平成12年4月といえば、今から10年前の春になる。大学を卒業した私が真成寺へ戻ってきた年のことだ。お檀家さんのお宅へお邪魔をし、仏壇の前でお経を唱える月参りの際、しばし会話をさせていただき談笑しているが、その会話の中で「若さん（私のこと）は、まだお若くて羨ましいですねえ…」と、羨ましがられることがあった。たしかに80歳のお年寄りから見れば、白髪も無ければ皺（しわ）も無く、肌艶も良いとくれば若いに違いないが…どうの私には、その「若さの良さ」が実感として湧かなかつたのである。

それは、風邪を一度も引いたことがない人に、「健康が何よりですね」と語ったところで、その理解するところは、風邪で寝込んでいる人の比ではないのと同じ事だ。

つまり「若者に若さって何？」と尋ねたところで、答えられるはずがないのである。病気で寝込んだことのない元気な人に「健康って何？」

と尋ねているようなもの。ここで言わんとする事は、よっぽど意識的に生きている人でない限り、経験をしなければ分からないという事だ。

苦しみや悲しみのない人生なんてあり得ない。また嬉しく楽しみのない人生もあり得ない。これは表裏一体のもの。コインの表と裏が同じ大きさで、必ず両面あるように、光と影が一体となつているのがこの世の真理といえよう。自分に降りかかる人生の痛みや悲しみを経験した人でなければ、人の心の痛みや悲しみを理解することは出来ないだろう。人生の苦悩を経験すればするほど、その人の魂のレベルは向上していくという道理になる。『ノーベル平和賞』の受賞者を見れば合点いただけるだろうか？昨年オバマ大統領がノーベル平和賞を受賞したのは記念受賞的などころがあるが、平成16（2004）年に受賞したのはケニアの環境副大臣ワンガリ・マータイさん。彼女は日本語の『もったいない』を旗印として「民主主義と平和への貢献」の為に、環境分野の活動家としては史上初のノーベル平和賞を受賞した。アフリカ人女性としても史上初だったそう

次に、バングラデッシュのムハマド・ユヌスさんは、バングラデッシュにあるグラミン銀行総裁であり、また経済学者でもある。平成18（2006）年に、彼は「マイクロクレジットなるものを創り、貧困層の経済的・社会的基盤の構築に対する貢献をした事が評価された。

インドのマザー・テレサも忘れてはいけないだろう。彼女は昭和54（1979）年にノーベル平和賞を受賞しているが、彼女の言葉にも信仰に裏打ちされた「愛」を感じる。彼女の言葉をも1つ引用しよう…「愛は家庭に住まうものなのです。子どもを愛し、家庭を愛していれば、何も持っていないかもしれない。21世紀は目に見える物質主義的価値観からの脱却が鍵を握るだろう。そのヒントがこの言葉には含まれている。つまり目に見えない精神的価値観を重視するところに平和や、幸福への糸口があるという事だと思ふ。言うまでもなく、信仰心もその1つだ。他にも素晴らしい方々が受賞されているが、彼らの様に高貴な魂が育まれた国とはどういう国なのだろうか？彼らが生まれ育った国に共通することは、

飽食の国ではなく、貧困国であるということ。つまり貧困国ほど偉大な魂を生み出すという事を裏付けているのではないだろうか。

先程の表裏一体の真理から言えば、当たり前と言えば当たり前前の道理になるだろう。苦悩を経験すればしただけ、本当に大切な事が見えてくるという事になるのではないだろうか？であれば、私達もジタバタせず人生で起きる出来事に、一喜一憂する自分の心を恐れず素直に受け入れようではありませんか。

私が行脚を志したのも、私達が安穏な心で生活する事が出来るようにと、世界平和への祈りを込めた気持ちには勿論のこと、そうした目に見えない存在や、自分自身の精神的価値観を確認する為でもあった。理屈ではなく、その体験から感じる苦悩や、感激などの喜怒哀楽を、シツカリ感謝の念を込めて受け入れることが出来る自分との対話であり、神仏様への感謝の念。そしてその先にある平和への念であった。

（前号の続き…）

さて世界遺産『醍醐寺』を後にした私が、次に向かったのは『知恩院』

だ。『知恩院』の境内は身延さんの境内くらい大きく、圧倒されながら本堂に入ると、修験（山岳信仰）の寺院の様に、重々しく厳しい雰囲気とは違い、何か温かみのようなものを感じた。

修験の信仰は、目に見えない天地自然に対する畏敬の念を強く持つ特色があり、それゆえ人の持つ念の強さが厳しさとなって宿っているのかもしれない。その点『知恩院』は念仏信仰。いわば穏やかな心で念仏を唱える信仰。その穏やかな念いが、温かみとなってお堂に漂っている様に感じた。もちろん、どちらが良い悪いという話ではない。

次に参詣したのは『聖護院』だった。京都銘菓と言え「八つ橋」です。そして「八つ橋」と言え「聖護院」と言われる様だが、その『聖護院』は修験のお寺で、由緒ある不動明王様が祀られており、御宝前にてお題目読経を小一時間くらい唱えさせてもらい、行脚に向かう心を一層厳しいものにしていただいた。

『聖護院』を後にして京都市中を行脚しながら、次に参詣したのが「関

西身延」と言われる日蓮宗寺院『妙傳寺』だった。本堂前にて思う存分大きな声で法華経を読経させてもらった。

やはり他宗派寺院と違い、日蓮宗寺院では気兼ねなく法華経お題目を、大きな声で、心ゆくまで唱えられるので本当に気持ち良い祈願読経ができた。

次は、京都最古の禅寺『建仁寺』だった。ここでは豊臣秀吉が使用した茶室なども残されており、枯山水など禅寺独特な雰囲気の中、堂内を参拝する。

次に『八坂神社』に詣でた。境内に入ると、神主さん達がお堂の屋根根を見上げて何かをしようとしていた。何だろうと思っていると、今日は「お堂の放水検査の日」だと言う。参拝に來られていたおばちゃんに声を掛けると「私は地元の人間で、いつもお参りに來るけど、こんな初めてやわ」と。恐らく読者の中にも「放水検査」の現場に居合わせたことがある方も少ないのではないかとと思う。そんな珍しいタイミングに参拝できた事に胸躍らせながら、放水検査の作業を見物していた。放水は、あの葦葺屋根のてっぺんからザバーと、屋根全体に大量の水が噴き出す仕組み。また、その周辺からは、お堂に向かってブシューと、消防

車の放水の如く、激しく勢いのある水がお堂目がけて一斉に放たれた。そんな現場を目の当たりにしながら、「これなら、もし火事になっても安心だわ」と、そんな事を思いながら放水検査の状況を眺めていた。『八坂神社』にも沢山の神仏様が祀られており、参拝にも熱が入る様な、有り難い聖域だった・・・。

仏教では仏・法・僧の三宝というが、京都行脚で感じたのは、神社仏閣の場所の持つ聖域のパワーや、そこに祀られている神仏様の存在の大きさは有り難く感じるものの、残念ながら、それを守っている（管理している）人間（神主や僧侶）の意識の低さを感じた。『信仰の聖域』ではなく、『觀光地』に成り下がっている寂しさと、憤りを感じた。皮肉なことに、飽食の国へと成長した我が国日本の現代社会が忘れ去ってしまった、一番大切な目に見えない存在への畏敬の念を取り戻すことが、いま一番肝心で大切な事なのではないかと感じる。私達も身の回りを振り返り、自分の振る舞いや心の持ち様を、内観しようではありませんか 合掌

副住職 谷川寛敬

「に」ろちゃんクイズ



今月は、漢字の問題です。お天気の色。読めますか？

問一 陽炎

問二 野分

問三 菜種梅雨

問四 五月雨

問五 薫風

先月の答え

問一 アヤメ、杜若はアヤメ科

菖蒲は、サトイモ科

問二 青、白、紫、黄、赤